

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

井上弘樹

【所属】(助成決定時)

青山学院大学大学院文学研究科・博士後期課程

【研究題目】

国立台湾大学医学院からみた日台関係史 (1945年—1970年代)

【研究の目的】(400字程度)

植民地期台湾では、日本の「科学的植民地統治」の重要な一部として、近代的な医学教育・研究・制度が積極的に導入された。これらは、戦後の日台間に何らかの影響を及ぼしたのだろうか。

近年、戦後の台湾医学史に関する研究が活発になりつつある。しかし、そこでは米援が果たした役割が強調される一方、植民地期に導入された日本の医学教育・研究の変容に関する研究は極めて不足している。

もちろん、戦後の台湾医学界に対する米援の影響力の大きさは否定できない。他方、植民地期に導入・形成された日本の医学教育・研究が、戦後の台湾医学界に残した影響や、日台間に及ぼした影響を論じない限り、米援が果たした役割も十分に論じることができない。また、この問題は、戦後東アジアにおける植民地の遺産をめぐる旧宗主国・植民地間のポストコロニアル的な議論にも通じる。

以上を踏まえ、本研究は、第二次世界大戦後の日台間の医学分野における交流の実態を明らかにせんとした。また、その際、植民地期の医学教育と研究の中心機関であった台北帝国大学医学部を接收して設立された国立台湾大学医学院に主な焦点を当てた。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、多様な資料を用い、様々な医学交流の実態を検討した。

資料は、『台湾医学会雑誌』、関係者の回想記録、政府刊行物、関係者への聴き取り調査などである。さらに、近年整理が進んでいる『国立台湾大学檔案』を利用することができた点は、本研究の発展に大きく寄与した。また、台北帝大医学部の卒業生である大鶴正満が残した資料の整理に携わる中で、日台間の医学交流をめぐる貴重な資料も発見できた。

具体的な研究に際しては、日台間の医学交流を大きく四つの時期に区分して検討した。

第一の時期は、1945年から1949年頃である。この時期には、留用された日本人が重要な役割を果たした。台湾大学医学院の場合、その留用政策には、初代医学院長の杜聡明が大きく関与した。杜は、留用された日本人を、若手の台湾人研究者を育成する「顧問」とし、日本の医学体系の継承を意識していた。

第二の時期は、1940年代末から1952年頃である。当該時期には、ほとんどの日本人留用者が帰国しており、また、日華間の国交も未樹立であり、人的交流は極めて低調であった。ただし、1950年に日台通商協定が締結され、日本からは医用機器や医薬品が輸入された。この背景には、台湾の未熟な製薬業界に加え、植民地期から続く日本の医療機器・薬に対する信頼の大きさがあった。また、不足品を速やかに手配できる地理的要因も重要であった。

第三の時期は、1952年から1972年までである。この時期、日台間の医学交流は増加傾向にあり、とりわけ1950年代末以降、その傾向が顕著である。背景には、日華国交樹立に加え、日本の学術界の再興、米援

の下での台湾医学界の再建があった。また、1959 年末以降、日本政府が支援する対外技術協力事業も活発になった。そこでは、植民地台湾で蓄積された人材・研究と、戦後日本における研究の蓄積、米援が重要な役割を果たした。

第四の時期は、1972 年以降である。この時期、交流を支えていた人的要素に変化が見られた。すなわち、戦後一貫して両国の医学交流を支えていた杜聡明や元台北帝大教授の日本人研究者たちが、研究の第一線から退いたことである。さらに、米援の支援が終了した台湾医学界もまた、その自立を模索していた。

#### 【結論・考察】（400字程度）

本研究では、1945 年から 1970 年代の日台間の多様な医学交流の存在を明らかにした。こうした日台間の医学交流は、旧植民地と旧宗主国が、どのような関係を築いていたのかという問題に関わる。ただし、こうした医学交流は、単純に旧宗主国・植民地関係に還元できるものではなく、戦後の日本社会や学术界の再興や変化、米援の下での台湾医学界の発展、東アジアの地政学的要因などが、互いに絡み合った上に形成されていた。あるいは、学术交流や支援という名の下での、国家間親善や文化帝国主義といった論点も想定できる。本研究では、そうした医学交流を支えた複雑な構造を明らかにすることを意識した。

こうした問題は、日台間にとどまらず、日本と韓国、日本と沖縄、沖縄と台湾、あるいは英国・香港・中国など、他地域の事例との比較を通じて、より議論を深めることが可能だろう。その点で、本研究は一つのケース・スタディとして位置づけられるものである。